

---

# ギャロッピングプレイング

中陳 稗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギャロツピンググレインゲ

### 【Nコード】

N4669E

### 【作者名】

中陳 秤

### 【あらすじ】

「琴原駅」の近くにあるボロビルには探偵事務所がある。その名前は「道楽遊戯」。二人の所員はドメスティックバイオレンスのことを相談しに来た依頼人を助けるために早速行動に出るが……。 「道楽遊戯」シリーズの第一弾。（2009年4月27日改題）【閲覧形式：PDF推奨】

## 第一話：戯れる序説

某県某市某町某番地　ここに、一つのビルがある。四階建てで相当年期の入ったビル。外装に所々雨によるシミと罅割れがあり、入り口の上部にあるビルの看板も「傘倉ビル」の「倉」の字が無くなっていて。そういう理由からか近所では「傘ビル」と呼ばれている。某電話帳で調べてみても、「傘倉ビル」とは載っておらず「傘ビル」となってしまうている。役所も黙認しており、正式名称「傘倉ビル」は正式な名前ではなく、「傘ビル」が正式名称という意味と訳が分からない状況になっている。

そんなボロビル　失礼、「傘ビル」の三階に「道楽遊戯」というビルと相まって、訳の分からない名称の事務所が入っている。「傘ビル」入り口を入れてすぐの階段を上り三階へ。階段を上ったら左へ曲がる。すると、目の前に以前この場所に入っていた企業や事務所の看板が貼ってあったのだろう。無理矢理剥がした跡が至る所にあつた。接着剤の痕が残っていたり、無理矢理剥がしたせいでドアの塗装が剥げ、中の錆びた鉄がむき出しになっている所もあつた。そのドアの下には小皿に盛られた塩……曰く付きの事務所らしい。

《トントントントン》。

と、階段を上る音が聞こえた。その音の主は小柄で童顔の青年。青年は背中に青いリュックを背負い、手に持っている原付のキーをチャラチャラ鳴らしながら上ってきた。髪は黒くて長い。「レッド・ホット・チリ・ペッパーズ」が描かれた白いＴシャツを着ていて、黒いハーフパンツを履いている。

青年は三階まで上ると、例の「道楽遊戯」へと向かっていった。そしておもむろにドアを開ける。

「こんにちは」

と少々気だるそうに挨拶をして入っていった。

ドアがバタンと閉ま……らない。しばらくして青年が引いたのだ

るうか、今度はちゃんとドアが閉まった。相当なボロビルだということが分かる。

さて、青年は中に入って広々とした事務所にポツンと置かれた二つの机のほうに向かった。その二つの机、向かい合って置いてあるのだが、机の状態が両極端だった。比喩的に言えば磁石のN極とS極が見事にくっ付いている感じだ。

片方は書類をちゃんと立てて置き、筆記具をペン立てに入れ、パソコン周りも髪の毛一本も落ちていないほど綺麗な机。

もう片方は、書類を乱雑に置き、ボールペンの蓋は開きっぱなしで、パソコン周りは書類の山でキーボードを押せない状態でとことん汚い机。

どうやら、青年の机は前者のほうらしい。身なりは若者らしい格好をしているが、綺麗好きらしい。人間、外見で判断してはいけないうという戒めになっている。先ほどから青年は「レッド・ホット・チリ・ペッパーズ」の「Breaking The Girl」を口ずさんでいる。

「中道さん、まだ来てないのかなあ」

青年は椅子に荷物を置いてから、目の前にある汚い机を見ながら呟いた。どうやら、汚い机は「中道」という人の机らしい。

「中道さん？」

と青年は「道楽遊戯」入り口の横にあるドアに向かって呼びかけた。

「お？ 陽ちゃんか？」

と中からは女性の声がした。しかし、その言い方は若干乱暴な感じがした。

「またシャワーですか？」

陽ちゃんと呼ばれた青年 楽座陽太郎は少々呆れた感じに言った。

「シャワーを浴びちゃいけねえってのか？ ったく、シャワーぐら

いでケチケチすんじゃないよ」

と中の女性　中道凜なかみちりんが言う。汚い机の持ち主がまさか女性だったとは……。

それより、このボロビル……………「傘ビル」。シャワーが付いているとはなかなか洒落ている。やはり外見で判断してはいけない。

「ケチケチはしていませんが、イライラはしています。シャワーを付けたからって、そんな毎日ここで浴びなくても良いんじゃないですか？　ってというか、もう仕事の時間ですよ。」

「いいじゃねえか。減るもんじゃ無えんだからよ……………　ってもう八時半か！？」

「減りません。水道光熱費を取られてお金が減ります。それより時間、とっくに過ぎてますよ。九時十分前です」

「やっぱり、ケチじゃねえかよ……………　ってか、んなこと言ってるお前も遅刻じゃねえか……………」

どうやら、楽座は時間にルーズ　いや、中道も楽座も時間にルーズな性格らしい。中道はズボラな性格だというのはヒシヒシと伝わってくるが、楽座のほうは几帳面なのかズボラなのかよく分からない。

だが、器用だ。二つの会話を同時に成立させている。

「ま、いいや。もう体拭いてるから、もう少しで出るよ」

「なるべく早めにお願ひします」

楽座はそう言うのと、椅子に置いたりユックを床に置き、座った。

そして、パソコンの電源を入れる。

「未読メールが一件あります」

「ん？　未読メール？」

楽座は早速メールを確認してみる。

「お？」

メールを開いた瞬間。画面が真っ黒になり、右上から赤い字で。殺殺殺殺殺殺……………。

と一文字ずつ、結構速いスピードで表示され始めた。

「くそっ！ ウィルスか!？」

楽座が何とかしようと思っていると焦っていると、後ろから綺麗な手が伸びてきた。そして、片手なものにも関わらず、目にも留まらぬ速さで何かを打ち始めた。打った内容はあまりに早過ぎて解読不可能。だが、その手がEnterキーを押した瞬間。画面は通常に戻り、先ほどまでのことが何も無かったかのようになった。

「まだまだ甘めえなあ。陽ちゃんは」

楽座が後ろを振り返ると、そこには牛乳瓶を片手にニヤリと笑う中道の姿。体はまだタオルを巻いた状態だが。

「な、中道さん!」

「これぐらいのウィルスで焦ってるようじゃ。まだ勉強が足りねえな」

楽座は顔を真っ赤にしている。中道からはボディソープの香りがある。

「服を着てください」

「お?」

楽座は顔を真っ赤にしたまま、書類を取り出し、先日の事件に関する報告書を作成し始めた。

中道は裸足でひたひたと、脱衣所の方へ向かっていき、牛乳を一口飲んで。

「まだまだ、初心だね」

と笑いながら脱衣所へ入った。

## 第二話：現れる胎動

平和な日が多いほど、いざ非常事態に陥ったときに対応できないことがある。いくら訓練をしても、その場面に立ってみれば何も出来ずにあたふたする。間違っただけを以て被害が大きくなったらどうしようと言う考えと、突然のことで頭の中が真っ白になってしまうことが原因。

逆に非常事態に関わることも多いと、平和なときでも常に警戒する。いつ非常事態が起きてもいいようにと万全の準備をするし、訓練もする。微かな物音でも反応してしまうほど。という少し過言かもしれないが、非常事態での被害がどれほど大きくなるかも予想が出来るしその被害に対する対処法も分かる。それらが頭の中に入っているということは、被害が少なく済むこともある。

そう考えてみると、平和が多いよりも非常事態が多いほうが良いのでは。と思えるが、実際のところはそんなことは無い。平和すぎて非常事態発生時に何も出来ないのと非常事態が多すぎて平和なときも警戒する。これでは両極端すぎる。その間へうまい具合に入れないものか。その間へ入った人はいるのだろうか。

模範解答としては「いたとしても極僅か」が正解。

では、常に暴力を振るわれる人と常に暴力を振るっている人。これは先ほどの例とは全く持って関係が無いこと。先ほどの例はあくまで例であって、両極端のことを考えるといたためだけの前振りである。

この場合、傷を負う人と傷を負わせる人に置き換えることも可能。

なぜ、暴力を振るわれる人（傷を負う人）と暴力を振るう人（傷を負わせる人）がいるのだろうか。人間の欠点の一つに力関係で上下関係が分かれるということがある。力よりも能力で分かれる方が良いのだが、力と能力。同じ「力」が入っているが、全く違う二つ。要は頭を働かせているかいないかということ。当然、頭を働かす必

要が無いのは「力」であり、頭を働かす必要があるのは「能力」。  
力と能力。同じようで違う二つ。どちらに利点があるのかは言わ  
ずもがな。

黒いキャミソールに黒いジーンズ。黒い口紅が輝く唇と黒いマニ  
キュアを塗った爪。コカ・コーラZEROを片手に汚い机に座った  
中道は、一通の手紙を読んでいた。

黄色いTシャツに黄色いハーフパンツ。黄色いヘッドホンをして  
「リンキン・パーク」の「Given Up」を聞き、エネルギー  
を飲みながら、綺麗な机に座った楽座は、メールのチェックをして  
いた。

ふと、楽座は顔を上げ手紙を読んでいる中道を見た。窓から入る  
日差しで中道の読んでいる手紙が透けて、若干内容が見えた。ほん  
の一説しか見えないが、

助けてください。お願いします。

と、綺麗な字で書かれている。女性特有の流れが良い文字。滞りの  
無いような文字であるのだが、時折インクの強く滲んでいる部分  
がある。事情は分からないが思い悩んでいる節がある。

「中道さん、それ」

楽座はその手紙が気になったのか、中道に声をかけた。

「ん？」

中道はコーラを飲みながら楽座のほうを見る。楽座の方はまだ曲  
の途中だが、黄色いヘッドホンをはずしている（かすかにヘッドホ  
ンから音が漏れている）。

「ああ、これか？ 今度の依頼主だよ」

手紙をひらひらさせながら中道は応えた。

「依頼主？」

「ああDV ドメスティックバイオレンスだよ。依頼主は伏木可  
かな」

南子さん、二十三歳。彼氏がいて同棲どうせいをしているんだが、その彼が最近可南子さんに対して暴力を振るうらしい。拳やバットで叩く暴力と性的な暴力があるんだと」

「DV……酷ひどいですね」

「ああ、男の風上にも置けねえな」

「それで、その依頼主はいつこちらにいらっしやるんですか？」

「来ねえよ」

「え？」

楽座は驚いた顔をした。来ない。これが何を意味しているのか楽座には最初、分からなかった。だが。

「じゃあ、行くか」

中道は立ち上がると、手紙を封筒に仕舞しまい、黒いリュックに入れた。

「行くつて、どこへですか？」

急に立ち上がった中道に、少々混乱していた楽座は中道に聞いた。

「依頼主のところだよ」

「え？」

「ほら、行くぞ」

中道はリュックを背負い、ドアの方へ向かう。楽座は慌てて自分の黄色いリュックを背負って中道のあとへ続いた。

「傘かさビル」から歩いて十分のところに駅がある。「琴原ことばら駅」という駅でこの駅も「傘ビル」同様にポロい。ちゃんと駅員がいて自動券売機も自動改札機もある立派な駅なのだが、どうも「廃すたれている」感が否いなめない。外装と内装を綺麗にしたらまた一段と違うはずなのだが。

中道と楽座は基本的に県内の移動に関して車を使うことは少ない。電車で移動することが多い。楽座は車の免許を持っていないが、中道は免許を持っている。しかし、移動するときは専ほんら電車である。過去に一度、楽座が「何故車で移動しないんですか？」と尋ねたところ、「自分で景色を楽しめないだろ」と答えが返ってきたという。

余所見をしないという所では、優良ドライバーである。

依頼主、伏木可南子が彼氏と同棲しているアパートは「琴原駅」から四駅ほど離れた「久佐木駅」が最寄り駅。その駅から某大学の方へ向かい、しばらく歩くと右手に最近立てられたばかりの新しいアパートがある。「白波荘」という名前の二階建て六部屋のアパート。

そのアパートの二階、二〇一号室が依頼主、伏木可南子と彼氏が同棲している部屋だという。

「し、白波荘……」

楽座の顔が引きつる。楽座と中道は丁度その部屋のまん前にいる。

「何だ、陽ちゃん知ってるのか、このアパート」

中道は意外という感じで楽座の顔を見た。

「実は、前にこのアパートのこの部屋で殺人事件があったんですよ。この近くにある大学に通っていた女の子が、下の階に住んでた男に殺されたって事件なんです」

「ああ、知ってるよ。だが、下の階の男は何者かに殺され、真相は有耶無耶になっちまって、警察も捜査をお手上げ状態。途中で打ち切った。確か、そんな事件だったよな」

楽座は緊張した顔で部屋のネームプレートを見る。

「ネームプレートぐらい変えたら良いのに……」

そのネームプレートには可愛い字で「片里」と書いてある。

「あ、本当だ。確か、殺されたのは『片里悠美』とか言う子だったな」

「住んでる本人たちは知らないんですかね、この部屋のこと」

「まあ、まず知ってたら、真っ先に入居しねえだろうな」

それもそうである。殺人事件のあった部屋にはなるべく住みたくない。被疑者も死亡していて真相が分からない事件だったらなおさらである。

中道はドアの横につけられているインターホンを押した。

しかし、何の反応も無い。

「いないじゃないですか」

楽座が帰ろうとすると、グイッと中道は楽座のリュックを引っ張る。

「待て。依頼主はそう簡単に出られるような人じゃねえ」

「は？」

しばらくすると、ドアの鍵が開くのが分かった。中道はその音を聞いた途端にドアをゆっくりあけた。すると、そこにいたのは全身をベルトで縛られた女性がいた。どうやら、鍵は口で開けたらしい。さすがに疲れたのか玄関の所で座り込んでいた。

「な、中道さん！」

「大きな声を出すな」

中道は全身をベルトで縛られた女性　伏木可南子を自分の体で受け止めた。

「中道……凜さんですか？」

伏木の息は上がっていた。さすがに玄関まで出るのは苦勞したらしい。汗が止めども無く流れている。

「もう、大丈夫。今はずしてやるからな」

中道はそう言って伏木の体に縛られたベルトをはずし始めた。

「な、中道さん？」

楽座が中道を呼ぶ。しかしその声は少々震えている。

「何だ？　今忙しいんだ……っってお前も手伝え！」

「いえ、階段に……」

楽座が階段のほうを指差す。

「ちっ」

中道は舌打ちをした。

「白波荘」の階段に一人の男が立っていた。男の手にはナイフが乱暴に輝いていた。

### 第三話：乱れる実状

「陽ちゃん」

ふと、中道が楽座の耳元で呼びかけた。

「何ですか？」

同じように楽座も中道の耳元で返事をした。

「奔れるか？」

「奔る？」

「おうよ。あの気の狂ったオッサンを切り抜けるには奔るしかねえだろ」

階段を上りきったところで、オッサン……失礼、男 月代圭輔  
は虚ろな目をしていて、手には恒常のナイフが凶悪に輝いている。

月代は白いTシャツを着ていたが、もはや半分以上は赤い色に染められていた。一体、その赤は何処で付けたのだろう。その赤は卑しく塗りたくられていた。人の手形まで付いている。

「普通に正当防衛だと言って、蹴飛ばせばいいじゃないですか？」

「いいか？ 陽ちゃん。あの気の狂ったオッサンを相手に蹴りとか食らわしてみる。あんなに血をべったり塗りたくったTシャツを大事に着てるんだからよ、そうとうナイフには慣れてるはずだ。脛あたりをグサツとやられんぞ」

「殴ってみたらどうなります？」

「まあ、至近距離まで行ったら確実にやられるな」

いかにもヤバそうな状況なのにも関わらず、中道と楽座は冷静に話をしていた。

「……………気だ？」

月代が何やらぼそぼそと呟いた。

「ん？ 何だつて？」

中道が聞き返す。

「可南子をどうする気だ？」

月代の口から出たその言葉は、あらゆる憎悪が込められているようだった。凄く低い声が壁や廊下を這い蹲うかのように中道と楽座に届く。月代の虚ろだった目はぎよろりと中道を睨みつけている。手はナイフを強く握り締めている。

「中道さん？」

楽座はふと後ろを見て啞然とした。

「後ろに逃げ道はありませんよ？」

後ろには二〇二号室と二〇三号室、そして奥は壁だ。通路はそこで途切れているし階段すらない。

「陽ちゃん……」

中道は半ば呆れたように言う。

「勝手に逃げ道が無いなんて言うんじゃないよ」

「は？」

「逃げ道が無いんじゃない。お前が見つけられねえだけだよ」

楽座は理解できなかった。一体、中道が何を考えているのかも。ふと楽座が気づいたときには、ベルトを外された伏木は中道に担がれていた。

「中道さん？ 一体何をする気ですか？」

「行くぞ。陽ちゃん」

中道は伏木を担いだまま立ち上がった。

「可南子を返せ……！」

月代が一步、中道と楽座に近づく。

「へっ！ てめえに返すもんはねえよ」

中道はにやりと笑って、廊下の手すりに足をかける。

「中道さん！ まさかっ！」

「そのまさかだよ！ もっと頭を使いな、陽ちゃん！」

次の瞬間、中道は手すりに乗っていた。そして、伏木を担いだまま。

そこから 跳んだ。

「中道さん……」



つが可南子さんに対して感じている劣等感が可南子さんへの暴力へと繋がっていやがんだ……いや、可南子さんだけに感じているわけじゃあ無さそうだな」

「どういうことですか？」

「あいつのTシャツを見れば分かるとおり、あいつは何人がナイフで刺したんだ」

「でも、あのナイフを見る限りでは刺した形跡は見られませんでしたよ？」

「ああ、普通だったなら、ナイフに血痕が付いてるはずだ。だが、一滴も付いていなかった。血を拭き取ったような跡も無かった」

「……よくわかりません」

「あいつはナイフを何本か用意していたんだろうな」

「と、言うことは……」

「一人一本ずつ、真新しいナイフで刺したってことだろうな」

「何故、わざわざ新しいナイフを？」

「それだけ、あいつは自分が劣っていると思う部分が多いってことだろ。一本一本に自分が劣っている部分を込めて刺したって訳だ」

「用意周到と言うか、七面倒と言うか……」

「ま、あくまで予想だけどな。本来ならあいつに聞いてみるのが一番早えんだけどよ」

「聞くに聞けないですからね」

「今のあいつに聞いてみる。確実にあたしたちもやられっぞ」

中道は奔りながらふと、後ろを振り返った。遠くにいるが、確実に月代は追いかけてきている。あの劣等感が込められたナイフを握り締めたまま。

「警察を呼びますか？」

「いや、警察は呼んではまずい。出てきた瞬間に奴らは銃をぶつ放す。それだけのご免だ。今のあいつを下手に挑発はしたくねえし、あいつに聞きてえことは山ほどあるんだ。それに……これはあたしたちの問題だっ！」

急に中道は道を折れる。

「中道さん！ どこ行くんです？」

「いいから黙って付いて来い！ 今はあいつを煙けむに巻くしかねえんだよ！」

楽座も慌てて中道の後を奔る。中道と楽座の持久力はすさまじい物だった。白波荘から全力で走り続けて結構時間が経っているのにも拘かかわらず、汗は出ているものの息は上がっていない。

「中道さん……この道って」

「ああ、そうだ。あいつの所にちよつと厄やっかい介かいになろうぜ！」

先ほど道を折れたところから五〇〇メートル奔ったところに白を基調とした大きなバイクが見えた。

「あ、あのバイクは」

「いつ見てもかっけえな。あのバイクの黒いのが欲しいんだけどな」  
HONDAのシャドウ。750cc（排気量実質745cc）のバイク。キャンディーグロリーレッドが白を基調としたバイクにうまく絡み合い、スタイルの良さを醸かもし出していた。ちなみに、中道の言っている黒いシャドウもある。

そのシャドウを鼻歌を歌いながら磨こいている女性がいる。赤いツナギを着た背の低い女性（はたして、ちゃんとシャドウに乗れるのか心配になる）。マルポロを吸いながら、機嫌よくそして大事そうに磨こいていた。

「お〜い！ 慧けい〜！」

中道は走りながらその女性を呼ぶ。

「ほえ？」

その女性 榛葉慧しんばけいは少々間の抜けた感じで返事をした。

「おお、誰かと思ったら凜ちゃんじゃにやいですか〜。どうしたんですか〜？」

と間の抜けた、間延びした感じで中道に問う。

「ちよつと匿かくつてくれ！」

その言葉を聞いたとき、榛葉は中道と楽座の後ろに誰かいるのを

見た。

月代だ。だが、中道や楽座のような持久力は持っていなかったようで、先ほどよりもかなり差をつけられていた。

「おっけー。こっちこっちい」

緊張感の無い感じがどうも歯がゆいが、中道と楽座は榛葉の誘導で建物の中に入っていった。その建物の前を月代が立ち止まり、辺りを見回している。だが、しばらくしてまた走り去った。

中道と楽座はさすがに息が荒くなっていた。結構な距離を走っていたから無理もない。

「はあ……はあ、助かったよ慧……」

「珍しいねえ。凜ちゃんが顔を出すにやんて」

「はあはあはあ……お久しぶりです。榛葉さん」

「お、陽ちゃんも一緒かあ。久しぶりだね」

どうも、この榛葉。若干幼児っぽい所があるらしく、いちいちの行動が妙に子供っぽい。

「まあ、ちよつと待っててよ。麦茶持ってくるから」

「お、わりいな」

ふと、中道に担がれていた伏木がもぞつと動いた。

「ん……」

「お、気づいたか。もう、大丈夫だからな」

中道は目を覚ました伏木を肩から下ろし、床に座らせた。

「こ……ここは？」

「ここは、あたしの友達んちだ」

「おまたせえ」

と、麦茶を持って榛葉がやってきた。

「お、さんきゅー」

「はい、おねえさんも飲んで飲んで！」

榛葉は伏木にも麦茶を差し出した。

「ありがとうございま……あれ？」

「どうした？」

「どうしたんですか？」

「どうしたの？」

伏木の「あれ？」に中道、楽座、榛葉はキョトンとした。

「榛葉さん？」

「ほえ？」

突然な呼びかけに少し戸惑い気味の榛葉。だが、しばらくして榛葉は気づいたらしく。

「可南ちゃん？」

榛葉と伏木のやり取りを、しばらく呆然と見ていた中道と楽座。

「ん、知り合いか？ 慧」

「高校のクラスメイトだよ。卒業式以来だったんだよ」

「慧ちゃん変わってないね」

久しぶりに会った元クラスメイトに笑顔をこぼす伏木。

「可南ちゃん……」

だが、榛葉のほうは少し悲しそうな顔をした。嬉しくなかったのだろうか。

「……可南ちゃん、変わりすぎだよ。どうしたの？ 疲れてるよ？」

顔とか傷だらけだよ？ 何があったの？」

と、伏木の顔を見て次々と聞く榛葉。

「慧、落ち着け。変わりすぎてつかもしれねえが、とりあえず可南子さんを休ませねえと」

中道は榛葉を止めた。伏木のほうは物悲しいような顔をしている。そのやり取りを楽座は見ているだけで何もすることが出来なかった。

元クラスメイトが見ただけで、あまりに変わってしまったことが分かった伏木。伏木が月代と出会ったときから……出会ってしまった時から、伏木の歯車は狂い始めたのだ。まさか、元クラスメイトがこれほど自分を心配するまで自分が変わってしまったことに、伏木はこのとき、やっと気づいたのだった。

「陽ちゃん、休んでるところわりいけど、どうするか考えるからちよ

っと手伝ってくれ」

中道はどうして良いか分からない楽座を呼び、二人は部屋を出た。伏木と榛葉の間に会話は無く、ただ時間だけが過ぎていた。

### 第三話：乱れる実状（後書き）

#### 【参考資料】

本文中に出てきた、HONDAの「シャドウ」（バイク）についての資料は、  
こちらを参考にしました。

H O N D A   S h a d o w

h t t p : / / w w w . h o n d a . c o . j p / m o t o r - 1

i n e u p / s h a d o w | 7 5 0 /

#### 第四話：香れる煙草

「ふと、疑問に思ったことがあんだけどよ」

中道は樂座を呼び出して、別の部屋に入ったあと突然切り出した。中道は頭を掻きながら困った顔を浮かべていた。樂座にしてみればそんな姿を見たのは久しぶりだった。いつもは強行突破あたりまえ、破天荒よろしくな中道ではあるが、突如としてこういう顔を浮かべることがしばしばある。

「何か引つかかる点でも？」

しかし、樂座はいつもと変わらず話をする。変に気を使ってしまつと、順調に行つていたことまで悪い方向へと進んでしまつのではないか、と思つているからだ。

「あのオツサンが何でこの建物に入つて来なかつたんかなあつて」「どういう意味ですか？」

中道は天井を見ながら、

「遠く離されていたからつつても、あたし達の姿は見えていたはずだ。この建物に入るのだから見てるはずだ」

と言つ。樂座はハツとしたが、

「準備が整つていなかったとか、知らない建物に入るのは気が引けたとか、そういうことがあったからじゃないんですか？」

と返した。しかし、中道の顔は納得の表情を浮かべない。

「準備は整つてたろ。何てつたつてナイフを持っていたんだからな。さっきあたしが予想したように一本一本、劣等感を込めた新しいナイフであたし達を刺すつて手は使わねえだろ。あいつはあたし達に劣等感を感じているわけじゃあ無さそうだったしな。そもそも、あいつにとって可南子さんは何よりも拘束したい人物なんだからよ、単純にそれを奪つたあたし達を刺せば全ては終わるわけだろ？ そつだとすれば、知らない建物に入るのだから気が引けるどころか、ズカズカと入つてくるだろうよ」

「じゃあ、月代の狙いは？」

中道は頭をガジガジと搔いた。相当煮詰まっているらしい。

「まあ、あの時中道さんが誘導してくれなかったら、俺達は月代に捕まって刺されてたかもしれないわけですし、いずれにせよ助かったじゃないですか」

楽座は相当言葉に悩んだらしく、結構苦しい返ししか出来なかった。

しかし、中道の手は頭を搔くのをやめた。

「……陽ちゃん。今なんだった？」

中道は楽座のほうを見た。その顔は悩んでいる顔ではなく、閉ざされた道が開かれたような顔をしていた。

「助かったじゃないですか？」

「違う。その前だ」

「捕まって？」

「違いよ。その前だ」

「あの時中道さんが誘導してくれなかったら？」

「それだ！」

「？」

楽座は理解できなかった。この言葉に一体何が隠されているのかを。

「そつだ誘導だ」

「は？」

「誘導だよ。陽ちゃん」

「誘導ですか？」

「誘導と言うよりは、指示ってのが合ってるかもしんねえな」

「指示……？」

中道は未だにピンと来ていない楽座を見て少し呆れ、ため息をついた。

「はあ……わかんねえか？」

「あ、はい……」

「あのオッサンを指示していた奴がいるとするなら、この建物に入  
ってこなかったってのも筋が通る」

楽座はまだピンときていない。中道はそんな楽座の肩に手をやり、  
グイッと楽座の耳を自分の口元へと近づけた。あまり突然のことで、  
楽座はどうすることも出来ず、唯一出来ることといえば、頬を赤く  
するだけだった。

「いいか？ あのオッサンが仮に誰かに指示されて動いていたとす  
るよな？」

と、中道は小声で話し始めた。

「オッサンにはあだし達の姿が見えていて、しかも、この建物に入  
ったのも見てるよな？」

「はい」

「だが、誰かに『その建物には入るな』と指示されていたとしたら  
どうだ？」

楽座はハツとした顔をした。確かに、誰かに指示されていたとす  
れば月代はそれに従うだろう。

「でも、中道さん？」

しかし、楽座は納得していなかった。

「ん？」

「誰かに指示されているとしたら、トランシーバーとか使わないと  
出来ないんじゃないですか？ だって、俺達は急遽きゅうきゅうこの建物に入っ  
たんですから」

「陽ちゃん……まだまだ甘いな」

「はい？」

「トランシーバーが無くても、指示はできるだろ？」

「どうやって？」

「陽ちゃん、一生懸命奔つてたから気づかなかったたかも知れねえけ  
どよ……車が一台止まってたんだよ」

「車ですか？」

「ああ、黒い色の……車種までは分からなかったけどよ。ここから

五〇メートル手前の十字路にいたんだよ。あたし達の進行方向に対して左側にハザード点けて止まってたんだよ」

「……」

「仮に、その車の運転手が指示を出している奴だとするよな。大体の十字路にはカーブミラーってのが付いてるよな。そのカーブミラーであたし達がこの建物に入ったのを見たとする。遠く離れたオッサンに指示を出すには十分な距離だ」

「どうやって指示を出すんです？」

「そこまではわかんねえけど、ウィンカーをつけたり、パッシングしたりすりゃあ、オッサンへの指示は出来るだろ」

中道はある程度の予想が出来た。あくまで予想。真実はこれからだ。

「じゃあ、その車の運転手は？」

「それを調べるのは、これからの仕事だ。とりあえず、可南子さんはうちの事務所で保護する。鍵をしておけば問題ねえだろ」

「軽く監禁ですね」

楽座は中道の顔が普段と同じように戻ったのを見計らって、冗談を言った。

ズバシと中道のチョップが楽座の頭を直撃する。

「保護つつつたる。あんなオッサンと一緒にすんな」

と、笑いながら言った。

中道と楽座が榛葉と伏木のいる部屋に戻ると、そこは沈黙の場と化していた。結構長い時間、中道と楽座は話をしていたが、その間全く会話はなかったらしい。榛葉はマルボ口を吸いながら床を呆と見ているし、伏木は遠い目をしていた。

「うっわあ、なんだよこの重い空気は」

そう言いながら、よっこらしよと中道は床に座り、麦茶を飲む。

楽座も床に座り麦茶を飲んだ。

「……」

「……………」  
二人は相変わらず沈黙をしている。中道は半ば呆れて煙草たばこの箱をポケットから取り出した。黒い煙草を一本取り出して、ライターで火をつける。辺りにココナッツの香りが漂ただよう。「ブラック・デビル」という一風変わった煙草だ。

それを見て、ようやく榛葉が口を開いた。

「『JPS』じゃにやくにやったんだね」

「JPS」とは煙草の銘柄の一つ。

「あ？ ああ、ありや外見だけが黒くて、中は黒くねえからな」

パッケージは黒いが、中身は普通の煙草と変わらない白と茶色のカラー。「ブラック・デビル」はパッケージも黒ければ、中身も黒い。周りの人からしてみれば「毒々しい」とか「珍しい」と思える。「いい匂いだね」

榛葉は何故かしんみりした様に言う。

「……………」  
「この匂い……………」  
嗅かいだ事ある……………」

と、遠い目をしていた伏木がふと、そんなことを言った。

「へえ、珍しいな。この煙草、吸ってるやつって少ねえんだよ。あたしの周りで同じの吸ってる奴もいねえからな。何処で嗅いだ？」

中道は伏木に聞いた。

「彼から、この煙草と同じようなココナッツの匂いがしていたことがあったんです」

「月代から？ 可南子さん。そのことについて詳しく聞かせてくねえか？」

中道は興味津々に尋ねた。何か新しい情報があるかもしれない。「彼も煙草を吸うんです。あまり見たことがない煙草だったんですけど……………」  
確か『HIP HOP』っていうパッケージが黄色の煙草だったと思います」

「HIP HOP」。伏木の言っている黄色のパッケージはバニラの匂いがする。フィルターが甘く、どちらかといえば女の子が吸いそうな煙草である。

「『HIP HOP』か……珍しいな。それで？」

「はい。いつもは、彼の服からその煙草の匂いがしていたんですけど、三週間くらい前なんですけど、全然違う匂いがしたんです」

「それが、この煙草の匂いと同じだったって訳か？」

「はい」

中道はプカリと煙を吐き、

「彼の知り合いとかのことは知ってっか？」

と伏木に聞いた。しかし伏木は首を横に振った。月代の交友関係については全く知らないらしい。

「あ、でも……」

伏木は思い出したかのように、

「私の友達に中道さんと同じ煙草を吸っている子がいます」と言った。

中道はまたプカリと煙を吐いた。楽座はポケットから煙草の箱を取り出し、一本の煙草を取って火をつけた。こちらは「アメリカン・スピリット」。もちろん、黄色いパッケージの方。

「その友達の名前を教えてくださいかねえかな？」

「七瀬僚子ななせりょうこという子です」

その名前を聞いて中道は少々考える。これからどうするかについても一度考えているのだ。そして、

「陽ちゃん。それ吸ったら行くぞ」

と楽座に言った。

「へ？ 何処へです？」

「事務所に決まってるんだろ……陽ちゃん大体の目星は付いたぜ。後はこの一件の締めを楽しむんだよ」

「本当ですか？」

「あたしが嘘吐いた事あったか？ あたしは嘘とドタキャンが大嫌いだ。この宴会の締めで抜け出すなんざ許さねえからな」

中道はそう言って、ニヤリと笑った。

## 第五話：離れる疑問

中道、楽座は辺りに注意しながら伏木を「傘ビル」まで連れて行った。一番緊張したのは電車内。密閉された状況で襲われでもしたら回避はもちろんの事、防御でさえも危うい。

伏木は榛葉の家を出てから「傘ビル」に付くまでの間、一言も喋らなかつた。榛葉と別れるときですら挨拶もしないほど、沈黙を保っていた。榛葉は悲しそうな顔を浮かべて伏木を見送ったが、伏木と榛葉の間には目に見えない壁があつた。だが、何かの拍子でその壁は崩れそうな感じがした。その壁を崩すことを拒む<sup>こほ</sup>ように伏木の方が榛葉に抵抗があるらしかつた。榛葉が悲しそうな表情をして見送つたのにはそういう背景があつた。

榛葉にしてみれば、同じ高校の同じクラスに通っていた仲の良い友達が、全身傷だらけで人生を楽しんでいないように見えたのだから、相当心配をしているはず。だが、伏木にしてみればそれほどまでに親しい榛葉に対して、心配を掛けさせたくないという気持ちが働いていたらしい。もっとも、伏木がずっと沈黙を保つてしまつたので、逆に榛葉には心配の念が大きく積み重なつてしまつた。

「傘ビル」三階 「道楽遊戯」。中道は鍵を外しドアを開く。中道の手には公共料金の請求書と何通かの封筒があつた。中道、楽座、伏木は中に入る。ドアは……やはり完全には閉まらなかつた。楽座が手で引いて無理矢理閉めた。

中道は自分の机に請求書と何通かの封筒をドサツと置き、更衣室へと入つていった。楽座は事務所の真ん中においてある長椅子に伏木を座らせた。

「コーヒーと紅茶、どちらが良いですか？」

と伏木に聞いた。伏木は小さな声で「コーヒーを」と言った。楽座は給湯室<sup>じゆうきうしつ</sup>に入り早速コーヒーの用意を始めた。中道がインスタントコーヒーを嫌うため、コーヒー豆をミルで挽く所からはじめた。

事務所の中心には伏木が一人、ポツンと座っているだけになった。

「可南子さんさあ」

と更衣室の方から中道の声がした。

「はい」

と反応する伏木。すると、再び更衣室の方から、

「ちよつと、こつち来てくんねえかな？」

と中道が言う。伏木は長椅子から立ち上がり、更衣室の方へと向かって行った。更衣室の扉は開いていた。伏木がその入り口に立つと、バサツと何かが被さった。

「え？」

驚く伏木。

「お？ あっはっはっはっは！」

笑う中道。

「あれ？ 伏木さん？」

探す楽座。

「な、何ですか？ これ」

伏木は頭に被かぶさったものを取って見る。それはシヨーツ。

「え？」

「ああ、服も汗とか血とかで汚れてっから、着替えた方が良いんじゃないかねえかなって」

「でも、着替え持ってませんよ？ 私」

「いいよ、あたしの貸すから……っつっても、殆ど黒いのしかねえけどな」

さつき伏木の頭に被さったシヨーツも黒だったりする。

「良いんですか？」

「気にすんなよ。ほら、入った入った」

中道は手招きをして伏木を中に入れた。

「あの……ドアは？」

開きっぱなしの扉を見て伏木は中道に聞いた。

「ああ、それぶっ壊れてっから。気にしねえの」

気にしてください。と心の中で伏木が呟いたのは言うまでもない。「大丈夫だって。陽ちゃんは覗きなんかしねえって。なあ？ 陽ちゃん？」

中道は自分の椅子に座っている楽座に皮肉を込めたような言い方をした。楽座は口に含んでいたコーヒートを盛大に吹き出す。

「の、の、覗きませんよ！！！」

楽座は慌てふためいて言った。どうやら、過去に何かあったらしい。まあ、それはまたの機会に。

中道と伏木は着替え終わって長椅子に座り、楽座は盛大に吹き出したコーヒールの後処理をして自分の席に座った。

黒い無地のTシャツに膝上ぐらいの丈の黒いパンツを履いた中道が、真剣な顔をして伏木のほうを見た。

「さっきの、七瀬って奴について、もうちょっと教えてくんねえかな」

その中道の言葉に対する答えを言おうと、まるで姉妹のように同じ服装の伏木が口を開く。

「七瀬……僚子ちゃんは、同じ高校に通っていた友達なんです」

「じゃあ、慧とも同じ高校だったってことか」

「はい……榛葉さんとは高校に入ってからの付き合いなんですけど、僚子ちゃんとは小学校と中学校は違いましたけど、小さい頃からの付き合いなんです」

「最近、その七瀬には会った？」

「いいえ」

「最後にあっただのはいっ？」

「去年の大晦日です。その日は彼も一緒にドライブに出かけてたんです。私も僚子ちゃんも免許を持っていなかったので、彼の運転で「彼つてのは月代の事か？」

「はい……」

「よく、暴力振るってる奴とドライブなんかに行けたな」

「あ、その時はまだ暴力は振るわれていなかったんです……」

「？　じゃあ、月代が可南子さんに暴力を振るい始めたのは何時ごろなんだ？」

「今年の二月です」

「そうか……じゃあ、話を戻す。さつき言ってた月代が『ブラック・デビル』の匂いをさせていたのは、去年の大晦日の前？　後？」

「後です。そもそも、彼と僚子ちゃんは大晦日の日に初めて会ったんです」

「と、言うことは……月代と七瀬が可南子さんに内緒で会っていたのも有り得なくはねえのか」

中道の頭の中には二つのことが気にかかっていた。一つは月代と七瀬が会っていたとして、その目的はなんだったのか。不倫と言う線が一番濃い気がするが、別の線も俄かに感じる。一概に不倫と断言は出来ない。

二つ目は月代と七瀬のことではなく、伏木のことだ。DVを受けていたのにも拘らず、何故、月代のことを淡々と喋れるのだろうか。しかも、月代と七瀬が密かに会っていたことに対しても別に気にも留めていないような感じで喋っている。不倫だとして知っていて黙認しているのか、はたまた……。

「あれ？」

中道が考えに耽っていると、端で楽座が声を上げた。

「どうした？　陽ちゃん」

「あ、いえ。さつき中道さん、指示を出したのは榛葉さんの家の近くに止まっていた車の運転手だって予想しましたよね？」

「ああ、それがどうした？」

「伏木さん。七瀬って人は免許を持っていないんですよね？」

「ええ、持っています」

「っ！」

中道はハツとした。免許を持っていない七瀬が運転手のはずがない。運転が出来ないのだから運転席に座っているはずがない。いや、

ただ単にフエイント掛けるためか？

待てよ？ あの車……。

中道はニヤリと笑った。

「はぁ、吃驚したわぁ……でも、陽ちゃんのその言葉がなけりゃ、変なところで突っかかちまうところだった」

「え？」

「陽ちゃん。日本にある車は全部が全部右ハンドルだとは限らないんだぜ」

「……外国車！」

「その通り。だとすれば、七瀬が助手席に座っていたことになるな」「それでも指示を出すことは……」

「断然可能だな」

「でも、月代と七瀬が会っていた証拠はありませんよ？」

「ああ、それくらい知ってるっつ……可南子さん、何か、こつ……月代と七瀬が会っていたって証拠はねえかな？」

「……彼の携帯を見れば分かるかもしれないけど……」

「あいつが持つてる可能性がデカイな……他にはなんかねえかなあ」「……………」

伏木はありとあらゆることを考え始めた。あの忌まわしき部屋の隅すみから隅までを頭の中で探していた。一体、何かがある。

「電話……………」

「だから、電話は」

「固定電話」

「家の電話ってことか！」

「彼、固定電話の使い方がよく分からないって言っていました。留守電の消し方も分からないみたいです。彼、機械音痴おんちなので」

「もしかしたら、電話に留守電とか入ってるかも知れねえ……いや、待てよ？」

中道はまたもや引っかかってしまった。携帯電話を持っているにも拘らず、わざわざ家の電話に留守電を入れることがあるのか？

「月代の携帯が壊れたってことはねえか？」

「……そういえば、一ヶ月ぐらい前に携帯をトイレに落としたって言ってました」

「壊れてるのか……その時、既に可南子さんは拘束されていたんだよな？」

「はい。あのベルトでガチガチに縛られて身動きが取れませんでした」

一ヶ月くらい前に月代の携帯が壊れている。

七瀬に携帯が壊れたことを伝えたとする。用があれば七瀬は月代の家の電話にかけてくる。

家の電話の操作をよく理解していない。留守電が残っている可能性はある。

伏木は既に拘束されていて身動きが取れない状況にあった。という事は伏木が家の留守電を聞くことは出来なかったということになる。

そういうこともあってか、月代は家の電話にかけてくるなど七瀬に言っていない可能性がある。

「よっしゃ、陽ちゃん！ 行くぞ！」

「行くぞって？ 何処へです？」

「白波荘だ！」

「待って下さい！」

伏木が中道と楽座を止める。

「明日にしましょう。明日は彼、仕事ありますし、長い時間家を留守にしています。私、鍵を持っていますから、彼がいない間に入ってみましょう」

伏木は笑顔を零して言った。その笑顔には何が込められているのだろう。

## 第六話：崩れる予想

次の日。時刻は十一時三十分を示していた。結局中道、楽座、伏木は「道楽遊戯」に泊まった（中道も楽座も自宅から通っている）。「可南子さん、あの部屋の鍵をくれ！」

中道は伏木に部屋の鍵を渡すように指示をした。その言葉に青いヘアピンで前髪をまとめていた伏木はキョトンとした。

「私は、どうすればいいんですか？」

伏木は中道にあの部屋の鍵を渡しながら聞いた。

「外に出りゃあ、また月代が襲い掛かってくるかも知れねえからよ、ここに居りゃあ安全だ。陽ちゃん！行くぞ！」

中道は部屋の鍵を楽座に放り投げた。

「え？俺もですか？」

「ゴリラズ」の「Left Hand」を聴きながら、コーヒールを飲んでいた楽座は慌てて空中を舞う鍵を取った。

「伏木さんはどうするんですか？」

「だから、ここに置いてくつつの。今、月代に遭遇してみる。また奔る破目になんぞ」

「確かにそうですけど、あの部屋に連れて行けば他に何か分かるかもしれないじゃないですか」

「いや、もつとちゃんとした証拠があるはずだ。留守電も聴いてみつけだよ、その留守電を聴く前にあるはずだ。『白波荘』から慧んちのとこまでの間に見かけたあれがよ。大丈夫。この事務所 いや、ビル自体案外頑丈だからよ。ここはちょっととした秘密を抱えているビルに入ってる事務所だから、ちょっとやそつとのことじゃ簡単には入れねえ仕組みなんよ。可南子さんを置いていっても何の支障もねえ」

中道は自信たっぷり話す。その自信は何処からやってくるのか楽座には理解できなかった。

「結局、月代に遭おうが遭うまいが奔るんだけどよ。ここから『琴原駅』までと『久佐木駅』から『白波荘』までは奔んぞ」

中道はいつの間にか冷蔵庫から出してきたコカ・コーラZERROを一気に飲み干し、ニヤリと笑った。

「奔れるとこまで奔ってやんよ。壁とか全部打ち破って絶対ゴールまでたどり着いてやんよ。24時間テレビのマラソン以上の感動を与えてやんよ」

中道、楽座は椅子から立ち上がり、ドアの方へと向かった。

「鍵はちゃんと閉めていくからな。誰が来ても出ないように」

と言いつつ聞かせ、「暇だったらDSでもやってれば？」と付け加えた。だが、中道の持っているDSのソフトは麻雀マージャンしかない。楽座に至ってはDS自体持っていない。

「道楽遊戯」を出て、鍵を閉めた。

黒いTシャツを着て、黒い膝上丈のパンツを履き、黒いリュックを背負い、黒いスニーカーを履いた中道。

黄色いメッシュキャップを被り、黄色いTシャツを着て、黄色いハーフパンツを履き、黄色いリュックを背負い、黄色いスニーカーを履いた楽座。

「準備体操はやったか？ インクレメンタル 増分値？」

足首をぐりぐり回しながら中道は楽座に聞いた。

「さっきの奔りが準備体操ですよ。絶対値アブソリュートさん」

楽座は笑いながらそう応えた。

絶対の「Absolute」。

増分の「Incremental」。

予想を予想とせず、絶対にそうであると言い切る自信のある中道と予想の上で疑問が増えていき、新たな道を開いていく楽座。この二人が「道楽遊戯」という事務所を作ったのにはこういう二人の性格や行動が切欠となっている。

「さて……行くか」

「行きましよう」

二人は歩き出し、階段を下った。「絶対値」アブソリュート 中道凜と「増分値」インクリメンタル 楽座陽太郎は「傘ビル」を出ると、琴原駅の方へと 奔り出した。その二人を「道楽遊戯」の窓から見る伏木。その顔は素敵で不敵な笑みを浮かべていた。あの二人なら大丈夫だという自信がその笑顔を作り出したのかもしれない。伏木は奔っていく二人が小さくなるまで見送った。

「傘ビル」を出てから五分ほどで「琴原駅」に着いた。こういう急いでいるときにカードは便利だ。改札にピツと触れば後は入るだけ。切符を買う手間が省けたのは実に素晴らしい。

丁度、中道と楽座が駅のホームへと階段を下つているときに電車が来た。「久佐木・砂原」ヒサキ・サハラ 方面行きの電車。二人がホームに降り立ったのと時を同じくして電車のドアが開いた。二人はその電車に飛び乗る。平日の昼下がり。電車に乗っている人は疎らだった。シートには十分座れるが、二人は立っていた。

電車に揺られること十分弱。電車の窓から見える外の景色は既に見飽きており、中吊り広告も特に目を引くものもなく、中道と楽座は沈黙を保っていた。聞こえるのは電車の走る音と車掌の放送だけ。二人はiPodを持ってこなかったことを少し後悔していた。「琴原駅」から「久佐木駅」までは十五分で着く。その間、一曲平均約三分半の音楽を五曲は聴ける計算になる。二人の後悔の点はそこだった。

「まもなく久佐木、久佐木です」と車掌の放送があり、中道と楽座は奔る準備を始めている、そんなことしなくてもいつでも奔れる状態だった。丁度ドアの真ん中に立っている。電車がゆっくりと止まり始める。

電車が完全に止まり、ドアが開いた瞬間。中道と楽座は再び奔り始めた。階段を一段飛ばしで上つていき、改札でTouch and Go! 二人は「大学方面」と書かれている東口の方へと奔っていった。

中道と楽座は警戒心を強めた。ついさつきナイフを持った男に追いかけられたこともあり、辺りを見回しながら奔った。

大学の方へと向かい、そんなに経たないうちに「白波荘」が見えてきた。何故か新しく綺麗なアパートなのに、凄く穢けがれて汚い雰囲気けいを醸し出していた。今までに二人の死人が出ているこのアパート。変な空気が漂うのも無理はない。

アパートの前には黒い車が止まっている。

「これだ。この車だ」

中道は車を見て言う。昨日、榛葉の家まで奔ったときに見たという例の車だ。

「この車が止まってたんですか」

「そうだ。この車に七瀬が乗ってやがったんだ」

「ここにあるということは」

「たぶん、月代の車なんだろうな」

車を確認した後、中道と楽座は階段を上り、二〇一号室の前へ立った。中道は早速、伏木から預かった鍵をドアノブの鍵穴に差し込んだ。

「ん？」

中道が違和を感じて声を上げる。

「どうしたんですか？」

楽座がそれを見て聞く。

「鍵が開いてやがる」

「でも、伏木さんの話だと今日は月代が仕事で居ないはず」

「だよな？」

中道はゆっくりとドアを開けた。

「空気が重えな……いやな予感がすんぞ」

中道と楽座は部屋へ入った。ドアを音がしないように静かに閉めた。部屋の中はしんとしており、誰もいないような感じがした。だが、鍵が開いていた。無用心極まりない。

「血ちなま腥まえ……」

廊下を進んで奥の部屋の方へと進む。部屋の入り口のところで中道はそつと中を見た。そこには壁の奥にかよつかかっている、今日いないはずの月代の姿があった。

「月代がいんぞ」

と中道は非常に小さな声で楽座に言う。

「そんな……」

と楽座が肩を落とす。

「けどよ……なんか様子が変だぜ」

中道は頭を掻いた。楽座がそつと中を見る。やはり、月代の姿がある。だが、その月代は項垂れている。ふと楽座が床を見た。

「中道さん」

楽座は頭を掻いている中道を呼び。

「あそこ見てください」

と床を見るように言った。中道は床を見る。そこには赤い液体血が落ちていた。

「っ……」

中道がぱつと部屋に入る。項垂れる月代の胸元にはナイフが刺さっており、そこから赤い血が伝って、柄えからポタポタと落ちていた。「くそっ！」

中道は急いで月代に近づき口元に手をかざし、呼吸を確認。続いて首に手を当て脈みやくをとる。

「死んでやがる」

「そんな……」

ふと、中道は電話の方に目をやる。電話には液晶の画面がついており、留守電の件数が表示されるのだが……。

「誰か消しやがったな」

電話の液晶画面には「ルスロケン」と表示されていた。

「誰が、こんなことを」

楽座が部屋を見渡しながら言う。すると、楽座の目にあるものが飛び込んできた。

「中道さん！ これ見てください」

「ん？ なんだ？」

中道は楽座の指をさす方を見た。

「これは……」

床に落ちていたのは青いヘアピン。口が開いている。中道はふと考え始めた。

「このヘアピン……どこかで見たな」

昨日の事からついさっきの事まで中道は記憶をめぐらす。脳かの海馬いはをフル活動させているのが端はたから見ても分かる。そして、

「ふっ……あたしたちはまんまと騙された様だ」

と中道はニヤリと笑って言う。

「騙された？ 誰にですか？」

楽座は中道をそんな見て聞く。

「伏木可南子……依頼人にだよ」

と中道は落ちているヘアピンを再び見てそう言った。

## 第七話：怒れる絶対

「白波荘」の周りには警察官の姿は一人も見られなかった。中道が警察に通報しなかったことで、この問題は中道、楽座、伏木、七瀬だけの問題になった。

中道は月代の死因について、調べてみた。まずは月代の胸に刺さっていたナイフ。これは昨日、月代が持っていたものと同じ物。刃渡りは15センチと長かった。その長い刃が四分の三ほど月代の胸に入っていた。とすれば、刃先は完全に心臓に到達しているものと考えられる。

次に死亡推定時刻。死後硬直ゴウジツが見られなかったことと、血液がまだ凝固キョウコウしておらず、液体の状態で落ちていたことを判断すると刺されて一時間以上は経っていないものと考えられる。少し前に刺されて死んだ。

「ここまでナイフを突き刺すたあ、いい度胸と腕してんな」

中道は感心したように言った。

一方の楽座は月代と七瀬が会っていたという証拠を掴むために、家宅搜索をしていた。いくら、伏木がしていた青いヘアピンが落ちていたからと言って、完全に伏木が犯人だと決まったわけではない。中道と楽座は七瀬がどういう人物なのか知らない。もしかしたら、七瀬も青いヘアピンをつけていたという可能性がある。楽座には納得と理解が出来ていなかったというのも搜索の理由だ。

クローゼットのある部屋は一つだけ。楽座はその部屋を中心に探していた。月代の物と思われる上着を片っ端から調べていく。ちゃんと手袋ははめている。

「ん？」

楽座は上着を調べている中、ふとクローゼットの下を見た。女性物のバッグが置いてあった。

「伏木さんのかな？」

失礼して中を開けて見る。中は空っぽで何も入っていない。いや、よく見るとバッグのポケットの中に白い紙の様なものが二つ見えた。

「何だこれ」

楽座はその紙を取り出した。

「!!!!」

楽座は仰天した。そして

「中道さん!!!!!!」

とすぐさま中道を呼んだ。検死をしていた中道が急いで楽座の元にやってきた。

「どうした?」

「こ、これ……」

楽座は驚きを隠せない状況でその紙を中道に見せた。

「白い封筒じゃねえか……っ!?!」

中道は封筒を楽座から受け取り、その表面を見てハッとした。

一見、真新しい綺麗な封筒なのだが、その封筒には「遺書<sup>いしょ</sup>」と書かれており、裏には「七瀬僚子」の文字があった。

「遺書……七瀬の遺書か?」

「そのようですね。伏木さんの字とは違います」

楽座は伏木が送ってきた手紙の内容を思い出した。あの字とこの遺書の字、全く違う。女性らしい綺麗な字ではあるが、バランスが全く違う。

中道は封筒を開けて中の手紙を取り出した。封筒の中を見ると、

「ブラック・デビル」が一本だけ入っていた。

「圭輔君へ……この間は誕生日プレゼントありがとう。とっても綺麗なピアスだからいつも着けてるよ。でも、可南子ちゃんにバレちゃったね。私たちが付き合ってたこと……。私、可南子ちゃんにこんなに怒られたのは初めてだったから、なんだかショック受けちゃった。

私、あれからずっと可南子ちゃんに嫌がらせされてるんだ。本当

は私が悪いんだけど、結構酷いの。警察にも相談したんだけど、全然相手にしてくれなくて……辛くなっちゃった。こんなことで死ぬなんて思っちゃうなんて、私って弱い人間なんだね。

今までありがとう。もう、私どうしたらいいかわからなくなっちゃって。多分、間違った道なんだろうけど……私の決めたことだから。また、圭輔君にどこかで会えたらいいな。じゃあね、バイバイ。追伸：妹には内緒にしておいてね。あの子、私が死んだこと知ったらどうなるかわからないから」

中道は手紙を読んだ後、静かに封筒の中に仕舞った。

「何が……」

と中道は静かに呟いた。

「え？」

「何が……助けてくださいだよ……」

「中道さん？」

「全部、あいつが悪いんじゃないか。人を二人も死なせやがってよ……」

封筒を持つ中道の手は震えていた。怒りによる震えだ。

「あいつを探すぞ……あいつを……伏木を」

キツと睨みつけて、中道は部屋を出た。慌てて楽座も部屋を後にした。

「中道さん！ 待ってください。まだ、伏木さんがやったとは決まってるじゃないですよ」

怒り心頭の中道を楽座は必死で止めようとする。

「楽座！ 良いか、よく聞け。あたしが嫌いなものは二つあるよな？ さあ、その嫌いなものとはなんだった？」

楽座は「陽ちゃん」とは呼ばない中道が本気で怒っていることを判断した。ああ、こうなったら手を焼くかもなとも考えたし、中道の嫌いなものを思い出し始めた。

「嘘とドタキャン」

「だよな？ 伏木はな、そのうちの『嘘』の方を平気で選んだんだ

よ。しかも、あたし達を本気で陥れるぐらいのマジな『嘘』をな。あたしはあいつを絶対許さねえからな」

中道は歩きながら手の関節をポキポキと鳴らしている。

「あの、質問していいですか？」

楽座はそんな中道を見ながら、恐る恐る聞いた。

「何だ？」

怒っていないながらも、ちゃんと聞いてあげる中道だった。

「伏木さんは月代に拘束されていたんですよね？」

「違えな。その逆だ」

「月代が伏木さんに拘束されていたってことですか？」

「そうだ」

「何故、そうだと？」

「月代の死体の傍に物がいっぱい落ちてたろ？　ありゃあ、抵抗した跡だ。それに月代の死体にも色んなところに傷があったからな。もみ合いの末、グサつてな」

「？」

「いいか？　伏木は拘束をされていたはずだよな？　力関係的には月代の方が強いはずだよな？　じゃあ、何で月代がもみ合いになるほど抵抗をしていたのか。ナイフを持っていたとしても拘束されるぐらいの人間じゃ太刀打ちできずに、また拘束されんだろ」

「そうですね」

「でも、月代は必死で抵抗をしていた。これは、伏木が圧倒的に有利な立場に居たからなんじゃないか？」

「じゃあ、俺たちが最初、あの部屋に行ったときに伏木さんが拘束されていたのは？」

「多分、伏木の指示だろうな」

「じゃあ、俺たちが逃げているときに見かけたって車は？」

「そこなんだよ」

「え？」

「今、全然わからなくなってるのは……あそこに事前に車を置いた

としても、中に乗っていた女は誰だ？」

中道は考えをめぐらす。

「妹……？」

「はい？」

「七瀬の妹か？ 七瀬の遺書に書いてあつたら？ 『妹』って」

「あ……」

「月代は七瀬の妹とも面識があつたんだ。昨日、その妹を乗せてあそこに車を止めるように言われたんだ」

「誰にです？」

「決まつてんだろ！ 伏木だよ……あたしの推理はこうだ。まず、月代よりも力関係の上の伏木は月代に対して簡単に指示ができるはずだ。『やらなかつたら殺す』とでも脅されたんじゃないのか？

月代は伏木をベルトで拘束した後、事前に呼び出しておいた七瀬の妹を車に乗せ、慧んちの近くの十字路に止めた。そこで、ナイフを持ってまた『白波荘』に戻つてあたし達を襲わせた」

「そうだとすると、月代の着ていた血のＴシャツは？」

「あれ、あたしも後で気づいたんだけどよ。血なんかじゃねえんだよ」

「じゃあ……」

「ありゃ、ペンキだ」

「ペンキ……」

「血は乾いたら黒ずんでくる。あんだけの距離を走つたんなら、血も乾いてくんだらうよ。だが、あのＴシャツの赤は黒ずまずにずっと鮮やかだったんだ」

「じゃあ、全ては……」

「あそこにいる奴の入念な計画だつたつて訳だよ」

中道の見ると先には、中道が貸した黒いＴシャツ、黒いジーンズを身に纏つた伏木がいた。中道と楽座の方へと歩いてくる。その手にはナイフ。だが、赤い液体が付いている。

「よう、嘔吐うんちきさんよ？」

中道は軽く挨拶するように吐き捨てた。

「いかがでした？ 私に暴力を振るっていた男の亡骸は……？」

伏木は微笑みながら言う。足は止まらず、中道と楽座に近付いてくる。

「それ以上、こつちくんな」

中道は伏木に制止するように言う。だが、伏木は聞く耳を持たずに歩いてくる。

「ちっ。そのナイフ……」

伏木の手にあるナイフを見た。血がべったりと付いている。

「七瀬の妹か？」

「ええ、そうよ……お姉さんと同じ所にイかせてあげようかと思っ  
て」

「狂ってんな」

「お褒めに預かり恐縮です」

「褒めてねえよ、ばーか」

中道は伏木の目を見ながら後ずさり、楽座に耳打ちをした。

「陽ちゃん、奔れっか？」

「え？」

「奔れるかって聞いてんだよ」

「……はい」

突如として、中道と楽座は奔り出した。その後ろをやはり伏木が走って追いかけてくる。

「中道さん！ 何処へ行くんです？」

「『白波荘』だ。あそこにもう一つおもしれえもんがあった」

中道はニヤリと笑った。

「白波荘」からはそんなに離れていなかったもので、早くついた。

そして、中道と楽座は再び、二〇一号室に入った。その後を伏木も追いかけてくる。

中道は部屋に入るなり、先ほどのクローゼットのある部屋に入った。伏木が乱暴に部屋のドアを開ける音がしんとしていた部屋の中

を不気味に震わせた。

## 第八話：壊れる虚言

中道と楽座はクローゼットのある六畳の部屋で息を潜めながら、再びクローゼットを開けた。そのクローゼットの下に先ほどと同じ女性物の黒いバッグを取り出した。そして、中道はそのバッグの中に七瀬の遺書と一緒に入っていた、もう一枚の紙を取り出した。

中道は最初、何故こんな紙がこのバッグの中に入っていたのかさっぱり分からなかった。七瀬の遺書は月代宛。この紙の宛先は行政機関であることは間違いないが、一回、伏木を経由してから行政機関に届くはずである。

と言うことは、この黒いバッグは伏木の私物なのだろうか。それにしては、妙に真新しい。よれた感じも汚れた感じも全く見受けられない。買って箱から取り出してそのままの状態だった。

ドタドタと乱暴に歩く音が聞こえる。どうやら、月代の死体があるリビングの方に行ったようだ。少し足音が止む。どうやら中道と楽座を探しているようだ。探している間に足とかをぶつけているのだろうか、ガタンと言う音が時折聞こえる。そして、しばらくするとまた乱暴な足音がする。今度は中道と楽座のいる部屋、つまり六畳の部屋に近付いてくる。

六畳の部屋の目の前で一度足音が止まる。次の瞬間、思い切り蹴飛ばされてドアが勢いよく開いた。あまりの勢いにドアは一度壁に当たり、勢いを殺されてドアが少しではあるが揺れながらゆっくりと動く。そして止まる。ドアの前にはナイフを持ち狂気的笑顔を浮かべた伏木が立っていた。

「おーおー、おっかねえなあ」

と中道はニヤリと笑いながら伏木を見る。

「ここにいらつしやったんですか。無意味な行動は慎んだ方が良くないですか？ 結局のところあなた達はここで私に殺されるわけですし、そんな抵抗をしたって意味がないんですよ」

伏木はケタケタ笑いながら死んだような輝きのない目を中道に向ける。

「何故、こんなことを？」

楽座が聞く。伏木の死んだ目を楽座に向けた。顔は先ほどの狂気の笑顔ではなく真顔だった。

「何故？ あなたは随分と愚問を投げたがるようですね……単純なことですよ。あいつが不倫ふりんをしていたからですよ」

と真顔だった伏木の顔がニタアと笑い始める。その笑みは先ほどのそれだ……いや、それ以上だ。その顔を見た楽座は背筋が凍るような、腰の辺りから頭にかけて痺しびれるような感覚があった。恐怖というのはこういうことを言うのだろうか。楽座の額と背中には一気に冷たい汗が噴ふき出した。

「不倫をしていた証拠つてのは掴んでたのかよ」

中道は伏木に問う。伏木は再び中道の方に死んだ目を向けた。

「ええ、あいつが携帯を壊した後、僚子ちゃんは家の電話にかけてきてたんですよ。私が出るといつも用があるのはあの男でした……。それにあなた達の後ろにあるクローゼットに僚子ちゃんのバッグが置いてありますし」

「あれは、七瀬のだったのか」

中道はクローゼットの中にある黒い女物のバッグを思い出した。

「ええ、そうよ。大方、車に忘れたんでしょう。それをあの男がクローゼットに隠した。私はそれを見て、あまりに腹が立ったの、バッグの中に入っていたものを全部捨てたの。そしたら、あの男慌あわてて『何てことするんだ』って騒いでたの……この私に向かつて」

伏木は大きく目を見開いて言う。さっき 事務所に居たときは全く雰囲気が違う。

「それで、月代と七瀬を殺した……そうなんだな？」

「ええ、この計画を立てるのにどれだけ時間を費やしたか……」

「あたし達の事務所に依頼を出したのは、アリバイ工作のためだろ」

「その通りですよ。あなた達が困った人のところへ駆けつけるとい

うのも調べましたし、私が事務所にいけないということを書いておけば、確実にあなた達は私のところへ来ますしね」

「月代にナイフを持たせて、あたし達を襲わせたのは確実にアリバイを作るためだな」

「ええ。あいつが襲ってくるとなれば『白波荘』の周辺に居させると危険が生じる。事務所につれて帰るといいうのも予想していましたからね」

伏木は中道の問いに対して、淡々と語った。

「あなた達が榛葉さんと関わりがあったことも知っていましたし、『白波荘』から近いことも知っていました。おかげでうまい具合に事が進みました」

「七瀬の妹を殺したのは何故だ？」

「ああ、琴美ちゃん……私の計画を知ってしまったからよ。それに、あの子もお姉さんのところに行きたいと思っていたでしょうし」

その言葉を聞いた楽座がキツと伏木を睨む。

「ふざけんな！ お前のその勝手な行動で三人も死んでんだぞ！

なんとも思わないのか！？ その三人がどれだけ苦しんで死んだと思ってるんだ！！！」

楽座が思い切り怒鳴る。しかし、今の伏木にはそんなもの通用しない。

「関係ないわ……何人死のうが、私を愛してくれていない人はみんな死んでいいの」

伏木はニタリと笑って視線を楽座に向ける。

「どうやって、ここまで来た？」

中道は伏木の言葉には動じる様子もなく、冷静に質問を続けた。

「お前はあたし達より後に事務所を出たはずだ。どうやってあたし達よりも早く着いた？」

中道が未だに解けていないこの謎。確かに、伏木は中道たちよりも後に事務所を出たはずだ。なのに、中道たちが「白波荘」に到着する前に月代を殺している。

「私一人だけでやったと思ってるんですか？」

その伏木の言葉の後、ドアがガタンと閉まる音がした。そして、六畳の部屋に近付いてくる足音。

「なんだ……ばれちゃったの？ 可南子ちゃん……」

と女性の声。伏木の後ろに立っていたのは黒く長い髪を三つ編みにし、紺色で無地のワンピースを着た女性だった。背は伏木と同じくらいで体系は痩せ型。青いヘアピンをしていた。

「ごめんね……僚子ちゃん」

僚子。その名前に中道と楽座は驚きを隠せなかった。

「七瀬は……死んだんじゃないかったのか！」

「誰が死んだって言ったんですか？」

伏木はニタリと笑って中道に言う。中道はポケットに入っていた封筒を取り出し、伏木に見せた。

「ここに遺書つてのがあんだけどよ」

それを見た伏木と七瀬は「あははははは」と大きな声で、部屋中に響くくらいに笑った。

「本物だと思ってたんですか？」

と伏木が嘲笑あざわらって言う。中道はニヤリと笑って、

「やるじゃねえか、この糞共くそども」

と吐き捨てた。

「全ては月代だけを騙だますための計画だったのか。一人の男を縛りつけ拳句に殺した……理由は不倫じゃねえな？」

中道が伏木と七瀬に問う。その問いに対して、伏木は呆れたように諦めたように明らかな嘘を明るみだすかのように語り始めた。

「本当のことを言いますよ……確かに不倫も理由の一つだったんですよ。でも、月代の選んだ不倫相手が悪すぎたんですよ……その相手は……僚子ちゃんの妹 琴美ちゃんだったんですよ」

伏木は七瀬の顔を見てしんみりとした風に言う。しかし、目は死んでいる。

「私の妹……琴美は月代に殺されたのよ。弄もてあそんだ拳句に平気で棄すて

た……妹はそれが辛くて自殺したのよ！」

「お前の妹は月代と付き合っていたのか」

「……私が月代と初めて出会った去年の大晦日より前に、既に知り合っていた」

「月代は琴美ちゃんと付き合っているうちに、僚子ちゃんの妹だということに気づいたんですよ。ばれる事を恐れた月代は琴美ちゃんを平気で棄てました」

「てことは、あの車に乗っていたのは……七瀬本人だったわけか」  
「ええ」

中道はふと、窓を見た。六畳の部屋には小さな窓がついている。その窓の外は廊下だ。しかし、その窓から脱出することは不可能だった。ジャロジー（何枚ものガラス板をブラインドの様に構成してある窓で、明かり取りや外気の取り入れに使われる）になっており、人が一人通れるようなものではなかった。

不意に中道が傍に置いてあったアナログ式の目覚まし時計を伏木目掛けて投げた。目覚まし時計は伏木のナイフを持っている左手に当たり、伏木はその衝撃でナイフを落とした。そこからは一瞬の出来事だった。中道はダツと伏木の方へと奔つていき、首筋に袈裟斬りチョップを食らわせた。瞬間、伏木の体は力を失いその場に崩れる。続いて、中道は七瀬の首を掴み、若干締めるかのようにして七瀬を後ろに押した。リビングと洗面所の間にある柱に七瀬の体が叩きつけられる。中道は七瀬の首を少しグイッと上に押し上げた。すると、七瀬の体は伏木と同じように力を失い崩れた。

「陽ちゃん！ 警察に連絡だ」

中道は手をパンパンと払うと、楽座にそう指示した。

楽座は急いで携帯電話を手に警察へと連絡をした。それを確認した中道は、先ほどバッグから取り出した一枚の紙を開いて、

「月代は琴美ちゃんを殺したかも知れねえけどよ。本当に愛していたのはお前だったんだよ、伏木」

と言つて、パスリと紙を床に落とした。その紙には緑色の字で「

婚姻届」と書いてあり、既に月代の名前が書かれ、印鑑まで押してあった。後は伏木が名前を書き、印鑑を押せば提出できる。そんな状態だった。

「奔るぞ！」

と言つて、突如として奔り出した。楽座はその後を慌てて追いか  
け、二人は惨劇の部屋 「白波荘」二〇一号室を後にした。

## 最終話：戯れる道楽

一度、TV局が心霊スポットと勘違いして取材をしに来たほど、外見と内装がおどろおどろしい雰囲気を醸し出ている。ポロビル

「傘ビル」の三階。そこに「道楽遊戯」という困っている人を助ける「お助け屋」の事務所が入っている。ドアは相変わらずポロポロで、以前入っていた業者が付けていたであろう看板の接着剤の痕があつたり、ドアの塗装が看板を無理矢理はがしたせいか剥けている部分もあつた。そのドアの下には小皿に盛られた塩。

その「道楽遊戯」、事務所の真ん中に依頼人応用の長椅子が二つとそれに挟まれるかのようにしてテーブルが置いてある。窓際に目をやれば極端に綺麗な机と極端に汚い机が向かい合わせに置いてある。その極端に汚い机の後ろの窓は開け放たれており、白いカーテンが窓から入ってくる風に靡いている。壁を見渡せば、細い罅が至るところに入っていたり、何時付いたのかはわからない様々なシミが付いている。

ガラリとした部屋には先ほどからシャワーの音が聞こえる。この事務所、ポロビルには似つかわしくないほど設備が整っている。事務所にはいくつか部屋があり、各部屋にはプレートがかかっている。確認できるところでは「浴室」、「更衣室」、「給湯室」がある。それ以外にも部屋が二つあるが、プレートが掛かっておらず、何の部屋かは分からない。

ガチャツと事務所のドアノブが周り、ギィーと軋むきしような音がして開く。

「おはようございます」

と気だるそうに挨拶をして、黄色いTシャツを着て、黄色いハイパントと黄色いスニーカーを履いた、髪の長い童顔の青年が入ってきた。ヘッドホンも黄色く、若干音が漏れている。その漏れている音から「KTタンストール」の「I Don't Want Y

「ou Now」が流れていることが分かる。

青年は原付の鍵を極端に綺麗な机の上に置き、ヘッドホンを外し iPodの電源を切り、辺りを見回した。

「本当にぼろいビルだよなあ……」

と一言呟いた。そして「浴室」の方へと歩いていく。

ノックを二回して一息置いてから、

「中道さん？」

とシャワーの音のする部屋のドアに向かって尋ねる。

「お、陽ちゃんか？ 今日には早いんじゃないか？」

と「浴室」の中から女性 なかみちりん 中道凜の声がした。機嫌が良いのか

明るい声で陽ちゃん ひくろふたろう 楽座陽太郎に言う。

「また、シャワー浴びてるんですか？ 自宅から来てるんですから

家で浴びてきてくださいよ」

「いいじゃねえかよ。ここまで来んのに汗かいちまうんだからよ。

汗臭えままで依頼人に会うわけにやいかねえだろ」

「よくありません。依頼人が来る予定の時刻まであと二十分しかあ

りませんよ？」

その言葉に、中道が静かになる。

「今……何時だ？」

「九時四十分です」

と楽座は黄色いG-SHOCKで時刻を確認して言った。

「てめえ！ また遅刻か！」

「中道さんほどじゃありませんよ」

「あたしは八時半にはもうここに来てるぜ。んでシャワーを浴びてる」

「もう、一時間以上も入ってるんですか！？」

楽座は驚いた様子だ。そんな楽座に「女は気い使うんだぜ」と中道は言った。

楽座は呆れたように自分の机へと歩いていった。そして自分の椅子に座るとパソコンの電源を入れた。まず、彼がするのは新着メー

ルが来ているかのチェックだ。立ち上がりの遅いパソコンにイライラしながら楽座は待っていた。

しばらくして、いつものデスクトップ画面が表示されると、楽座は早速メールのチェックを始めた。

「新着メール1件」

と表示されている。早速、楽座はそのメールを確認した。だが、なんだか様子がおかしい。いきなり画面がブラックアウトをした。そして、次の瞬間、裸の女性が横たわっている画像が画面いっぱいに表示された。それを見た楽座は、

「うわああああああああああああああっつつつつ！  
！」

とポロビルが崩れ落ちるんじゃないかと言うほど、大きな声を上げた。その声は当然「浴室」まで聞こえた。楽座は耳まで真っ赤にしている。

「どうした！？」

と急いで中道が「浴室」から出てくる。それも何もつけずに濡れたまま……つまりは裸で。それを見た楽座は

「うわああああああああああああっつつつつ！  
！」

とまた悲鳴を上げた。

「うるせえよ！」

と楽座の頭をはたく中道。肌を濡らしている水滴が飛び散る。

「おっ！ またウィルスか。陽ちゃん、よく引つかかるよなあ。でもこのタイプの画像が表示されるのは初めてか。全く、あたしに比べてみたら大したことねえ体だな」

中道はニヤリと笑ってパソコンのキーボードをカタカタと、目にも留まらぬスピードで打っていく。楽座は目の前の裸の女性と今横に居る裸の女性に挟まれ、目のやり場に困っている。完全に顔は真っ赤だった。

「よっ！」

と中道がEnterキーを押すと、ディスプレイに表示されていた裸の女性が消え、いつものデスクトップ画面が現れた。その画面を見て楽座はほっとしたのか一つため息をつき、振り返って

「ありがとうござ……」

と言いかけた所で止まった。目の前には中道の顔ではなく、中道の豊満な胸があった。

「うわああああああああああっ!!」

と再び悲鳴を上げる楽座。それを見て中道はニヤリと笑う。

「ちょっと陽ちゃん初心過ぎるな……どうだ？ 触ってみっか？」

と中道は楽座の手を取って言う。

「じよ、冗談は止めてくださいよ」

楽座は顔を真っ赤にしてたじろいだ。

「冗談なんかじゃねえよ。あたしが陽ちゃんを教育してやろうとしてんじゃねえか」

「教育って、何の教育ですかっ!？」

「あまりに陽ちゃんが初心過ぎっからよ、ちょっとした女に対する抗体をつけてやろうと思っただよ」

「遠慮して……」

「おきます」と言う間も与えず、中道は無理矢理、楽座の手を自分の胸へと押し当てた。ふにっとなんと沈む楽座の手。そのあまりにもやわらかい感触に、

「ふにやああああ」

と楽座は猫のような声を上げ、漫画のように鼻血を噴き出し、机に突っ伏した。たちまち机には赤い液体が広がっていく。

「あちゃあ、やり過ぎちまったか？」

と中道はニヤリと笑って言い、

「可愛いやつだなあ」

と楽座の頭を撫でて呟いた。

中道は鼻血を流したままの楽座を放置して「浴室」へと戻っていた。ボタンと閉まるドア。

事務所の中を窓から入ってくる風がクルクルと回る。外からはスズメの歌声が聞こえ、道を走る車の音が聞こえる。空は晴れ渡り雲がゆっくりと流れている。なんとも平和な一日が始まっていた。

「はっ」

と楽座はガバツと起き上がった。顔には自分の鼻血がべったりと付いている。

「おわっ！」

楽座は急いで事務所の片隅にある掃除用具入れを開く。事務所のドアと同じようにギイと軋む音がした。掃除用具入れの下においてある一箇所大きく凹んだバケツの中に、無造作に入れられた汚い雑巾きんを取り出し、「給湯室」へと入った。

かすかにコーヒークの香りのする「給湯室」に設置されている少し汚い水道で雑巾を濡らし、自分の机へと戻り自分の出した鼻血の処理をした。

「浴室」のドアが開き、黒いキャミソールを着て、黒いショートパンツを履いた中道が髪をタオルで拭きながら出てきた。

「おはようございます。中道さん」

その姿を見た楽座が挨拶をする。

「おつす。陽ちゃん」

短い挨拶をした中道は髪を拭きながら、掃除用具入れの隣にある本棚の隣にある棚の上にドンと置かれた二十インチのテレビの電源を入れた。そして「給湯室」へとはいつて行く。「給湯室」には冷蔵庫が置いてあり、いつもその中にはコカ・コーラZERROとエネルギーが入っている。中道は冷蔵庫を開けコカ・コーラZERROを手に取り「給湯室」から出て、自分の机 極端に汚い机に座り、自分の机に置かれた封筒を一通手に取った。

「……」

封筒に書かれた差出人の名前を見て黙る中道。

「陽ちゃん」

中道に呼ばれ、テレビを見ていた楽座はクルリと中道の方を向い

た。

「なんですか？」

「これ、今度の依頼人なんだけどよ」

と中道は封筒の差出人の名前を見せる。そこには「伺去祐依」と綺麗な字で書いてある。

「ん？　なんて読むんですか？」

「さあ……伺い去るんだろ？」

中道と楽座はうーんと考え始めた。

「振り仮名ぐらい付けとけよな……読めねえじゃん」

ボソリと中道は文句を言う。

コンコンとドアの方で音がした。

「陽ちゃん。出てくんねえか？」

「あ、はい」

中道に言われ、ドアの方へ行く楽座。再びコンコンと音がした。

「はい」

と重そうにあける楽座。ギーッと音がする。

「あの……こちらは『道楽遊戯』さんですか？」

と白いTシャツを着、膝下くらいの丈の白いスカートを履いた気の弱そうな、「お嬢様」と言う感じの女性が立っており、ドアを開けた楽座に聞いた。

「はい、そうですが……どちら様でしょうか？」

楽座が尋ねると、女性はあたふたと慌て始めた。

「あ、あ、す、すみません。わ、私、先日お手紙を出させていただきました、伺去と申します。今日、事務所に来てくれと連絡がありましたのでお尋ねしました」

どもりながら、自分の名前を告げる伺去。

「あ、伺去祐依さんですね。お待ちしておりました。どうぞ、中へお入りください」

楽座はドアを締まらないように体で押さえ、伺去を中へと招き入れた。伺去を中へ入れると、楽座はドアから体を離れた。ドアはゆ

つくりと閉まっついていき、ボタンと……閉まらなかった。中から楽座が引つ張ったのだろう、遅れてボタンと閉まった。

最近、「道楽遊戯」でチラシを作ったらしい。そのチラシは大体新聞に混じって入っている。もしかしたら、あなたの街でも「道楽遊戯」の名前が見られるかもしれない。

ここは、困った人を助ける「お助け屋・道楽遊戯」です。

事務所は所長の中道と所員の楽座で切り盛りしています。

困ったことがあったときは、お気軽にご相談ください。

あなたのために尽力いたします。

「道楽遊戯」は琴原駅を出まして、市役所方面を歩いていただき、

約十分ほどで見えてきます「傘ビル」の三階にございます。

お手紙でもご相談を受け付けております。お気軽にお送りくだ

さい。

お電話でもご相談を受け付けております。お気軽にお掛けくだ

さい。

お助け屋「道楽遊戯」

事務所長：中道凜 所員：楽座陽太郎

所在地：某県某市某町某番地 電話番号：

( ) ( )

## 最終話：戯れる道楽（後書き）

この度はご閲覧ありがとうございました。

これにて「奔れ！道楽遊戯」は終了となります。

この「道楽遊戯」もうちよっと思ひます。

なんだか、このキャラたちをこのまま終わらせたらもったいない感じがしたんで（笑）

それでは、近いうちにまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4669e/>

---

ギャロッピングプレイング

2010年10月8日15時42分発行